

カブール陥落

NATOにとっての不都合な真実

バイデン政権による一方的なアフガニスタンからの

米軍撤退は、NATO諸国に動揺を招いた。

今後は米欧が独自の戦略を

重視するようになるかもしれない。

戦略国際問題研究所 (CSIS) シニアフェロー

レイチエル・アルハース

戦略国際問題研究所 (CSIS) 客員フェロー

ピエール・マルコス

Rachel Ellehuus 2015～18年国防総省参事官 (欧州および NATO 政策を担当)。2009～12年英国国防省にも勤務、国防白書などに携わる。デンマークやチェコを拠点に研究活動も行う。欧州大学院大学より修士号 (政治学) 取得。

Pierre Morcos フランス外務省にて、サイバーセキュリティおよび戦略企画担当企画官。ロシア、欧州安全保障が専門。フランス国立行政学院 (ENA) を卒業。Sciences Poにて修士号 (国際関係論) 取得。

二〇〇一年以来、アメリカを中心として北大西洋条約機構 (NATO) 諸国とはアフガニスタンに深く関与してきた。この地において、実に三五〇〇名ものアメリカ・NATO軍の兵士が命を落としている。そのことを思えば、カブール陥落が欧州諸国に激震をもたらし、欧州諸国の指導者たちが、今回の事態がNATOに与える影響を議論するのも、無理からぬことである。

イギリスにおいては、議会下院におけるアフガニスタン臨時部会において、保守党のジェームズ・サンダーランド議員が「カブール陥落は、イギリスがアメリカの協力なしには軍事行動ができないことを示した点で、スエズ危機に

も似ている」と発言した。実はスエズの例を持ち出すことで、イギリスを覆う幻滅と怒りの感覚をうまく伝えようとした点では、サンダーランドが最初ではなかった。ベン・ウォラス英国防相はカブール陥落を「国際社会の大失敗」と評し、ドイツのキリスト教民主同盟 (CDU) 党首でアングラ・メルケル首相の後継者の有力候補であるアーミン・ラシエツトは、さらに一歩を進めて、これが「NATO創設以来最大の壊滅的敗北」と断定したのである。

こうした感情が、現時点における怒りと不満を反映しており、時間の経過とともに和らぐことはあるだろうが、NATOのアフガニスタン撤退そのものは、欧州、NATO、

そして米欧関係のそれぞれにとって、短期的にも長期的にも影響を及ぼさずにおかないであろう。

NATOにとっては致命傷ではないが……

バイデン米大統領が二〇二一年の四月に、同年九月一日までにアメリカ軍をアフガニスタンから撤退させるつもりだと発表したとき、欧州の同盟国はその過程で連絡や相談を受けることもなく、結論を一方向的に通知されることになった。そしてアメリカの決断そのものは、アフガニスタンの情勢よりもアメリカ国内政治上の計算からなされたものだった。NATOのスローガン「入るのもいっしょ、出るのもいっしょ」というのは、全加盟国の協議による決定を尊重することを意味するものだが、今回欧州側には、アメリカと共に撤退する以外の選択肢が残されなかった結果、「出るのもいっしょ」だったのである。

カブールの大混乱のおかげで、欧州では、NATOそのものの未来が悪影響を受けるような自信喪失を予想する者もあれば、アフガニスタンの崩壊が、イギリスにとってスエズ危機がそうであったように、アメリカの超大国としての役割の終焉を示唆する事件だったことを恐れる者もいる。だがこれらの予測は大きすぎで、的外れであろう。アフ

ガニスタンで進行中の事態が、NATOの法的基礎である北大西洋条約の第五条の、共通の脅威に対して加盟諸国が協力しなくてはならないという条文の精神を損なう可能性は低い。最近のインタビューで、アフガニスタンの現状について問われたバイデン大統領は、自ら「北大西洋条約の」第五条に対する公約は神聖なものだ」と確認しているのである。一方、欧州諸国としても、ロシア・中国との戦略的競合、コロナ・パンデミック後の世界経済の回復の促進、そして気候変動への対処といった自らの喫緊の課題において、アメリカが指導的・積極的な役割を果たすことが必要だという事情がある。このため、欧州諸国がNATOに背を向けるということも考えにくいのである。

無力な欧州、疲弊したアメリカ

むしろアフガニスタン危機の意義は、NATOにとって「不都合な真実」のいくつかを明らかにしたことかもしれない。欧州側にとってのそれは、アメリカが決断する際の計算に欧州は影響を及ぼせないこと、そして、自国や同盟諸国の民間人退避を自力でできないなど、自らの利益を守ることににおける無力さである。アメリカ側にとっての「不都合な真実」は、アメリカがいくら欧州に、欧州周辺にお

ける安全と防衛については自分たちでより多くの責任を担ってほしいと願っても、多くの欧州諸国はそのための政治的意欲も能力も欠いているという事実がそれだ。

ウォレス英国防相は最近、イギリス政府はアフガニスタンにおけるNATO駐留を維持するために「有志」諸国で連合軍を組織しようとしたが、アメリカが提供するさまざまな支援、特に空軍力がなければ考慮することさえできないという結論に、即座に達したということを明らかにした。ドイツのメルケル首相も「アフガニスタンにおけるNATOの任務に関しては、ドイツ軍や欧州連合軍が独自の役割を果たすことは不可能だった」と述べている。「私たちは常に、私たちが基本的にはアメリカ政府の決断に依存していると言ってきた」。大規模な軍事動員に時間がかかり、飛行機の空中給油ができず、戦略輸送も諜報網も十分でないというのが、欧州の軍事的現実なのである。

実は、アメリカが国際社会における指導的な役割から退こうとしたのは、今回が初めてではない。例えば二〇一一年のNATOのリビア介入の際に、オバマ政権は欧州諸国に現場を任せ、アメリカは「背後から指導する」と表明したことがある。その際、英仏をはじめ、同作戦に参加していた欧州諸国は、作戦遂行上の大々的な能力不足に直面し、

結局、給油作業の八〇％はアメリカが行うことになった。また、シリア政府がグータにおいて反政府勢力に対して化学兵器を使用した際に、オバマ大統領がシリアに対して「レッド・ライン」（軍事的制裁）を行使することに消極的だったことは、欧州諸国、特にフランスにとって衝撃的だった。フランスは軍隊をシリアに投入することに積極的だったが、アメリカの支援なしにはそうすることができなかったからである。最近では、一九年にトランプ政権が下した、一方的にアメリカ軍をシリア北部から撤退させ、その結果としてトルコ軍の一方的な進出を招いたことが、英仏両国から激しく批判されたことが記憶に新しい。

欧米間協力の将来

アフガニスタン危機について問われるべきは、それがNATOそして欧米間の協力関係をどのように変容させるか、という問題だ。

一つ考えられるのは、今回のアフガニスタン危機の経験によって、NATOがその関心を、これまでの加盟諸国の領域外における危機管理から、集団的安全保障へと変化させるということである。今回の危機以前においてさえも、終わりが見えず、しかも費用的にも高つくづく領域外におけ

る任務に参加することに対するNATO加盟諸国の政治的意志は弱まる一方だった。二〇一四年以後、NATOはその関心を再度、集団的防衛に振り向けるようになり、また、フランスがテロリズムを、そしてイタリアが非合法の移民を、それぞれ最重要の課題だと主張して譲らないなど、複数の加盟国が自国の安全保障上の課題を最優先する傾向も強まっている。

加盟諸国はまた、NATOの作戦任務に参加する際に、その参加条件についてより慎重になるであろう。特に、その作戦がアメリカの軍事力に多く依存するようであれば、なおさらである。加盟諸国は作戦任務の期間、任務完了の条件、そして撤退計画を、あるいは米軍支援のより明確な保証を、さらには作戦任務を決定・遂行する上でのより大きな発言権を求めるかもしれない。もはやアメリカに対する忠誠心や義務感だけでは、欧州側の軍事行動は期待できなくなっているのである。この傾向はすでに、イラクでは顕著となっている。イラクにおいては、欧州諸国はNATOによるイラク軍の訓練という任務においてより大きな役割を果たすことになっているが、欧州諸国はアメリカが空輸、情報収集、兵士の護衛など、ある程度以上の軍事的支援を行うことがその前提条件だと主張しているのだ。

最後に、欧州のNATO加盟諸国は、より柔軟で機敏な有志連合を志向するようになろう。NATOのコンセンサスに基づいた意思決定と兵力終結のための確立した手続きは、目的の共有と作戦任務の持続性という観点から、かつては好ましいとされていたが、今となってはNATOという枠組みを通じて行動することはより面倒臭く、しかも柔軟性を欠いていると見られつつあるかもしれない。

アメリカでは、カブール陥落はバイデン政権にとっての「サイゴン陥落」だと評されることが多い。これは特に、最近のカブールにおける劇的なテロ攻撃の後でそうである。だが、カブール陥落は欧州とNATOにとっての新たな「スエズ動乱」だと見ることもできるのだ。カブール陥落は欧州の戦略的野心の限界と、NATOの現実に対応する能力の不足とを明らかにしたからである。この危機によつてNATOそのものが危うくなることはないだろうが、これが欧州とアメリカの両方にとって、NATO戦略概念を再検討する上での貴重な教訓となることは間違いない。



(翻訳・徳川家広)

この記事はCSISのHPに掲載されたコメントリーをもとに再構成しました(左のURL参照)。

<https://www.csis.org/analysis/fall-kabul-inconvenient-truths-nato>